414
38

大阪文樂座人形畫集

全

始

壇浦兜軍記

長谷川千四の作享保十七年九月大阪竹本座にて初めて興行せし其頃流行の数々
平家の残党悪七兵衛景清は南都東大寺大仏殿再興ありて将軍頼朝の参詣と聞き
狙ひ討たんと[illegible]
[illegible]
[illegible]（此段を『琴の責め』と[illegible]せられて有名なり）
[illegible]岩永左衛門[illegible]
[illegible]以て大詰となる

演奏者

人形　吉田栄三
三味線　鶴澤友次郎
太夫　竹本津太夫

414-38
ヰ5ル10

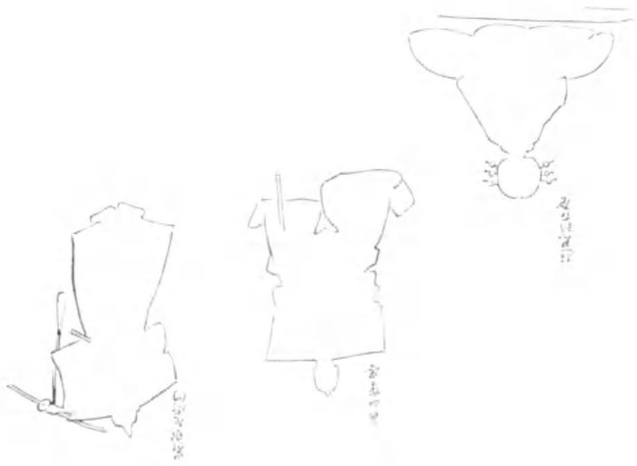
長谷川小信筆

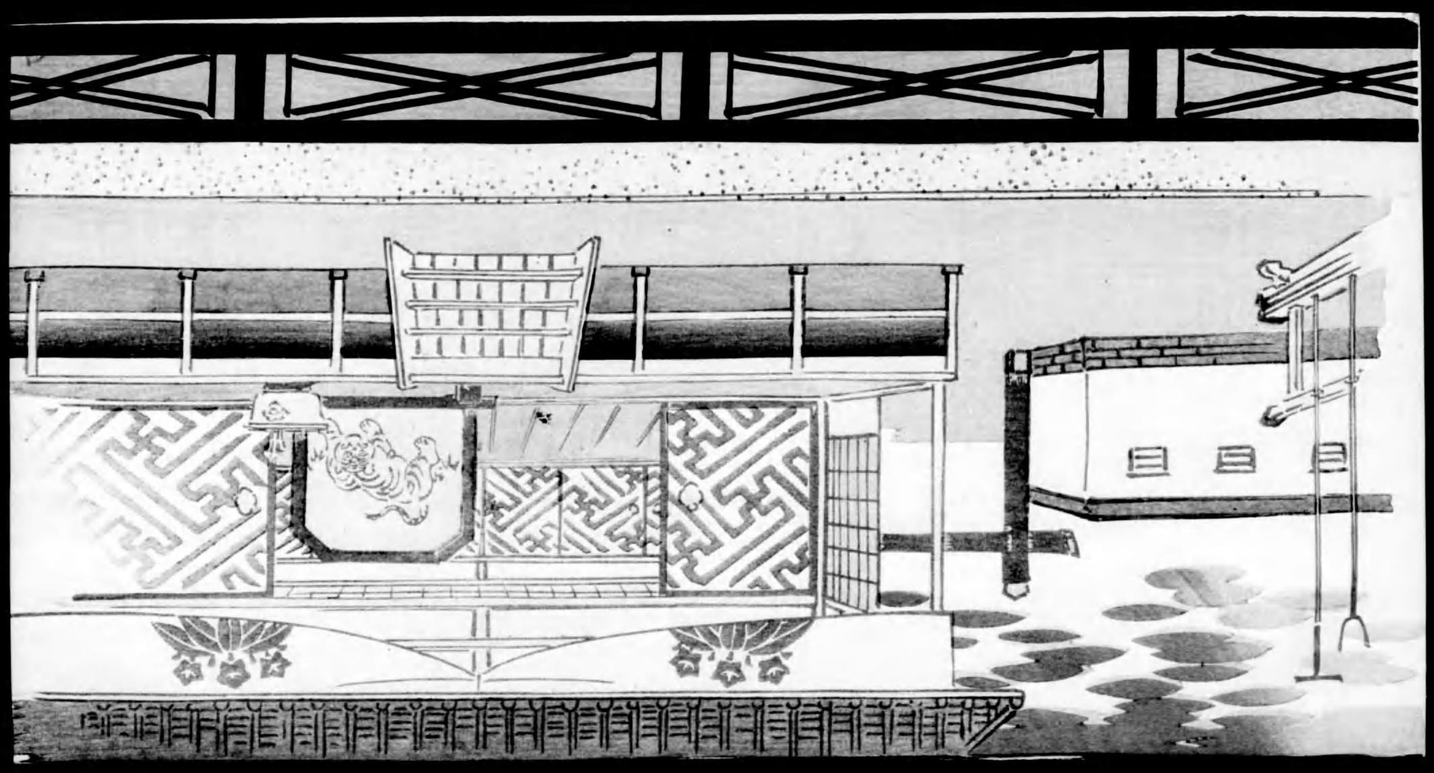
日本名物 大阪文楽座人形画集

第一輯

大正 15.8.25 納本

畠山重忠





静御前

義経千本桜

竹田出雲三好松洛並木千柳の合作延享四年大坂竹本座に於て初演其後諸方の[illegible]〜

[illegible]

を討取って大望となる

[illegible]

浄瑠璃

人形 吉田栄三

三味線 鶴沢友次郎

太夫 竹本津太夫

藝森太

楓忠信

熊谷次郎直実

玉織姫

無官大夫敦盛

仮名手本忠臣蔵

竹田出雲作並木千柳三好松洛の三人補作寛延元年八月大坂竹本座にて初演大入を取り [illegible]

演奏者

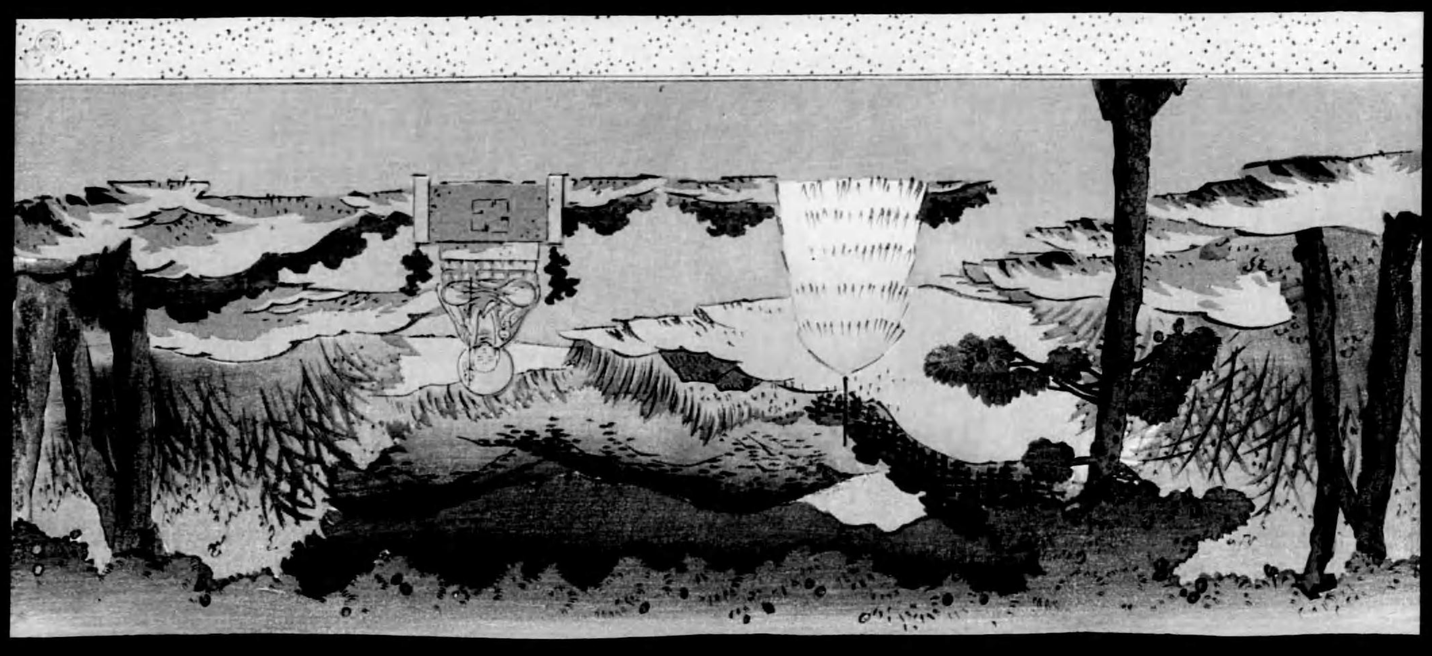
太夫　竹本津太夫

人形　吉田[illegible]

三味線　鶴澤友次郎

早野勘平

百姓與八郎

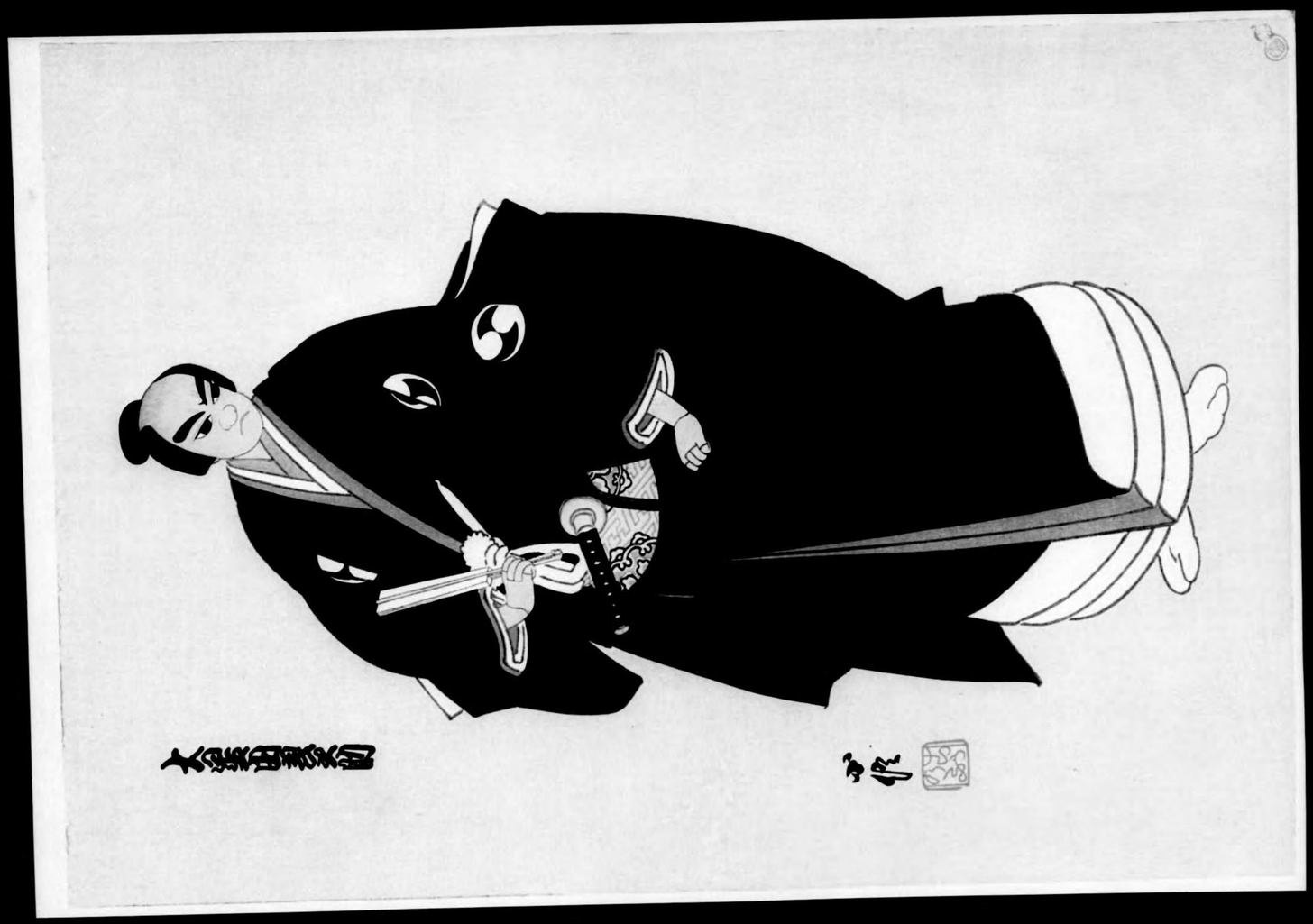


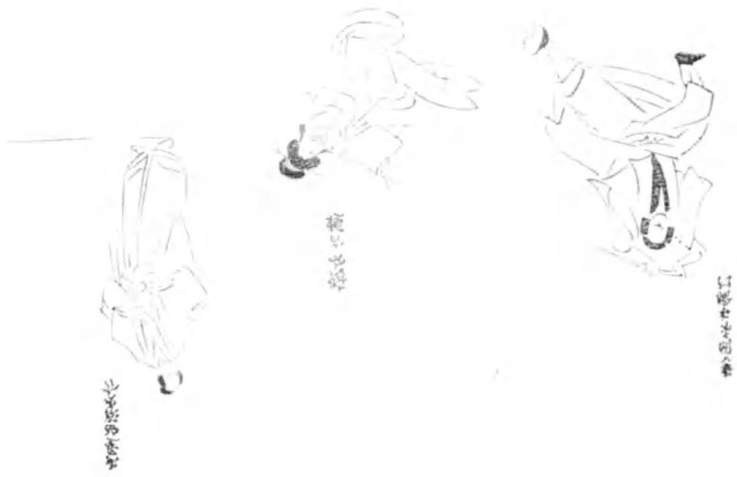
假名手本忠臣蔵　前段続き

(口説回)大星由良之助は敵を討ますとの祇園の茶屋へ力弥入らぬ様子を殺すか淡身お軽の究
寺岡平右衛門は元塩冶家の足軽なりしが仇討の連判に加はらんと頼みしかど由良之助は是の密書を釣燈籠の灰
焼ひき抱き斥けて問へ右衛門は平右衛門の妹お軽ハ二階より鏡で写してこれを読み
取らて彼の見すゝ時お軽は二階より鏡を写しこれを読む
一味の者へ内通せんとす大星の平しもとれと初めお軽を身請けして殺さんと決心平右衛門は大星の
意中を察しお軽を殺して夫れを功に仇討の連判に加はらんと計るお軽も父の与市兵衛の横死を
聞き入る又は右の望みもなしと覚悟する由良之助は兄妹の誠心に感じお軽を平右衛門を従者に加へ妹の
お軽には夫に代りて九太夫を討取らせるこれを茶屋の場とて全篇中尤も興味ある一段とす（八段目）加
古川本蔵の娘小浪は許嫁力弥と祝言をせんとて母戸無瀬と共に山科大星の閑居を訪ひ旧是
を道行旅路の嫁入とて美しき道行事なり（九段目）山科大星の閑居には妻お石あり小浪の母も
の折平本蔵も抱き止めし後本蔵の衛門殺刺されば山科を肝力弥の嫁とすると共に時節を
本蔵は妻子の跡より虚無僧となりて入来り由良之助を罵る力弥出て槍で突き討る
本蔵は其槍の手段を握り又これを縁組に突刺して大星も出て本蔵の陶碩の力弥の前
に本蔵は臨終の折人天川屋義平大星より密書を内通する恐れある故に義平の疑を御って離
縁し是の東へ下る一十段目)泉州堺の町人天川屋義平は
放丈もの由の国の其の蔵を皆は所の門へ内通する故に義平は動せぬ状者
縁し之れを嫌ひて其の泉を嬢の義平は天大星の貴き士を捕手に
のよき帰を講へ捕手として指さし網れ~めず大星の真の其使気を感じ討入の合図の言葉に天
と川との一の字を用ふ(十一段目)大星以下四十六の義士は師直の屋敷を取まき天と川との合言
葉で討入り本懐を遂げ師直を捕へ恨みは義士を殺すと女の霊前に供へし
帰り~涙に咽びつゝ大星以下四十七士の墓を後に死は徳本人は武士げに忠臣
の假名手本芽出度~く

浄瑠璃

太夫	竹本津太夫
人形	吉田栄三
三味線	鶴澤友次郎





万世流芳

伊賀越道中双六

近松半二作天明三年竹本座にて初演せし横綱ものゝ也
上杉家の老臣和田靭負の一子志津馬が傾城瀬川と契りしを幸ひ同家中沢井股五郎は酒色を勧めて正宗の名刀を奪はんとて和田の狼藉に靭負は門弟唐木政右衛門との不縁頻りに勘当を受く股五郎は靭負を殺害して正宗の名刀を奪ひ東海道を下り逃亡す。政右衛門は誉田家に抱へられしが縁りなく妻お谷を離別し新らしき嫁を娶らんと此の度の用意中伯父宇佐美五右衛門来り憤りて政右衛門に詰寄る折柄入来の花嫁は意外にも七歳の小娘てあつた政右衛門は李ひを打て靭負の仇を討つため志津馬の妹お後と祝言なして国太刀と称る一同喜び此と林左衛門との試合に負け暇を乞ふ大内記も来と察し暇を賜ふ。呉服屋重兵衛は道中沼津に来り雲助平作にて荷物を持たせしが過つて怪我せしより重兵衛は平作の娘お米を見へ娘は其所へ娘お米来り悦びて茶家へ行へ夜更けてお米は印籠を盗まんとす其を重兵衛見し此重兵衛は仔細を問へばお米とは昔の吉原の瀬川の果にて志津馬の病気を救はんためと涙ながらに詫び入る平作も平家なから一人の倅ありしと語り幼名を平三郎と聞く重兵衛は胸に応へしが名乗らず石牌供養の為と金を残し立て行く跡に続き印籠と脇指書にて親子と知れ印籠は又五郎の所持の物と判り平作は一散に後を追へ追掛け重兵衛に敵の行衛を尋ねしが又五郎の義理ある重兵衛は明さず平作遂に腹切り死に行く重兵衛も股五郎の行衛を明し九州相良の遠国に逃るゝの名乗りして落入る。股五郎の縁類の関所を越すに沢井縁家なき吾一郎の手の遠眼鏡に見惚れる間にその関所を通り抜け一人の関所にて捕手に囲まる股五郎に救はれ沢井家に来る志津馬は夫の跡を尋ね来りしが飛脚のため股五郎と通辺し志津馬と対面を又五郎は伊勢路より摂東へ落ちると判り伊賀の上野にて捕へして首尾よく本望を遂ぐ。

後援者

太夫 竹本津太夫
人形 吉田栄三
三味線 鶴澤友次郎

心中天網島

近松門左衛門の作享保五年十二月大坂竹本座で初演世話浄瑠璃の一
天満の紙屋治兵衛は妻子ある身で曾根崎新地紀伊国屋の小春に打込み内を外にする放蕩者
兄の粉屋孫右衛門は侍に姿を変へて河庄の内へ来り小春を呼び様子を探る処へ治兵衛は
魂ぬけてとぼとぼとせめて小春に逢はんと門口まで来れば内に小春は侍客に語りて「死にともない」
の言葉を聞き今は気も狂乱、脇差抜いて格子の間より突込むを侍の孫右衛門の下緒にて其手を格子に
縛り路次の騒ぎを押鎮める時通りかゝりし太兵衛は治兵衛を盗人と罵るを聞きかねし孫右衛門これを懲らし
追返す。治兵衛は漸く縛を解かれ小春に打ってかゝるを制するは兄孫右衛門なりと答へて、兄よ
りの起請を返し小春より取返す所、起請の中におさん(治兵衛の妻)よりの状
の文あるを見て小春の心中を察し一旦は治兵衛を伴ひ天満へ帰る。紙屋の内に治兵衛が炬燵に寝て居る所中
孫右衛門と伯母来り天満の太兵衛が小春を身請の噂さ、治兵衛ならんと案じ来りし事なれば治兵衛は
治兵衛がする事ならずと云ひ、おさんも嘆かずと云ふ、起請文を書かせて去る。後に治兵衛が涙に伏すのであれ
でかと恨み口説かれて向の闇より来ぬ未練なれど太兵衛に小春を取られては男の一分立たぬと
と聞きておさんは驚きそれでは小春は死ぬる覚悟と治兵衛に勧めて小春の身請の金と
里まで身請を急がしてくれと我の衣類を質に入れ調へる所へ
舅の五左衛門来り乱行を罵りおさんの衣類の風呂敷を開き入れず二人の子供を連れ
去って帰り行く、夜更けて治兵衛は二人の子供を連れ来り新地大和屋にて小春を連れ出し一門の北
め若覚悟せんものと話けば小春も二人ともに立ちて又小春はこの事を語りし
治兵衛は小春と共に網島の大長寺
藪の外面の山さへ川、流れ渡る橋の上を最期の所と辿り行くのである

浄瑠璃

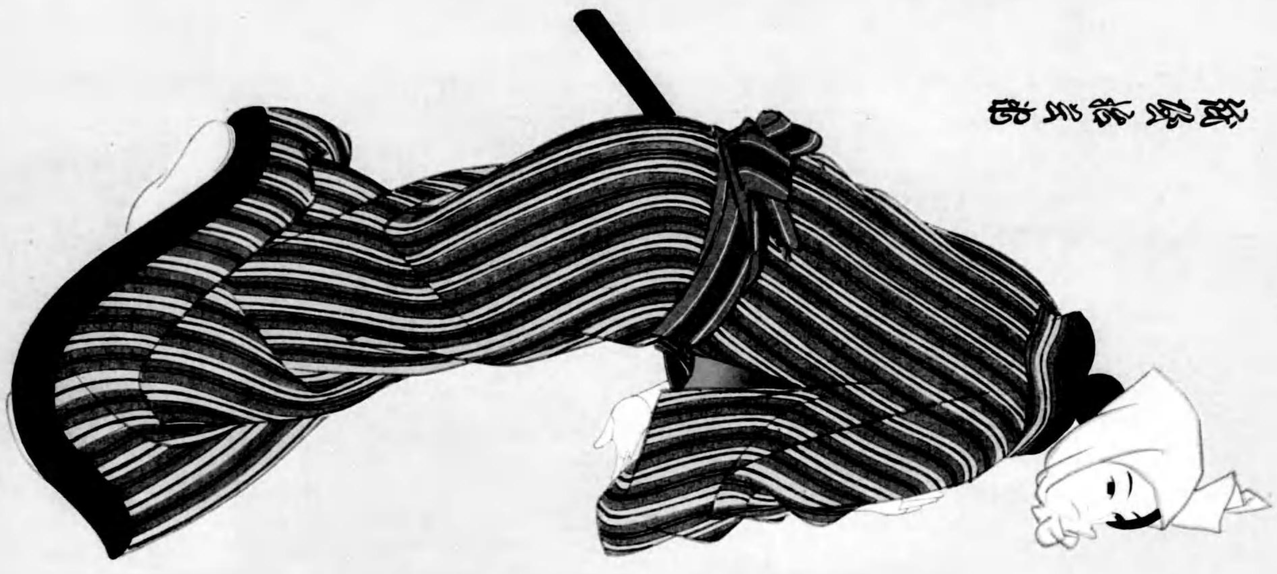
太夫　竹本津太夫

三味線　鶴澤友次郎

人形　吉田文五郎

粉屋孫右衛門

紀の国屋小春



本朝廿四孝

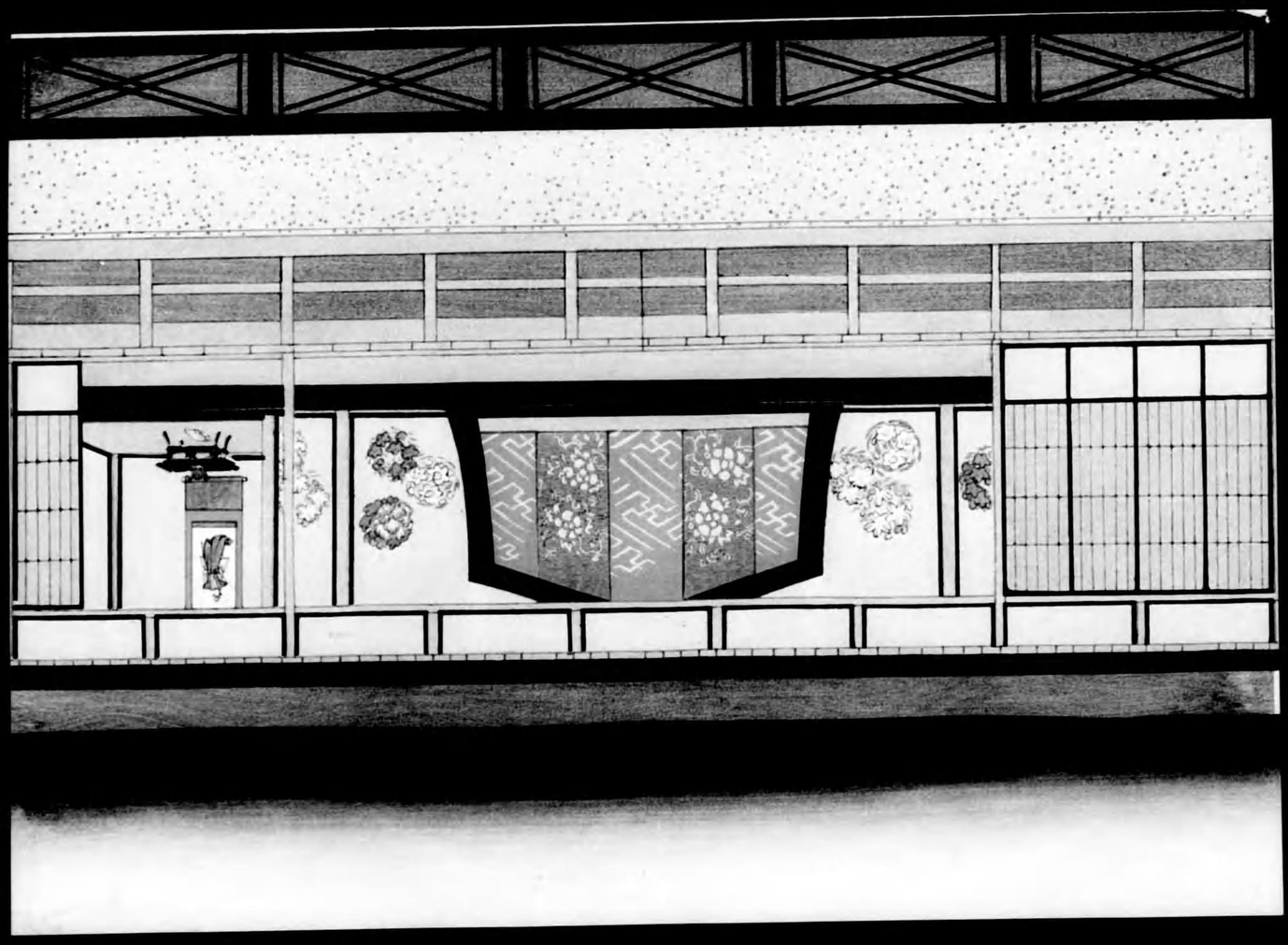
[illegible]

演技者

太夫　竹本津太夫
三味線　鶴澤友次郎
人形　吉田文五郎

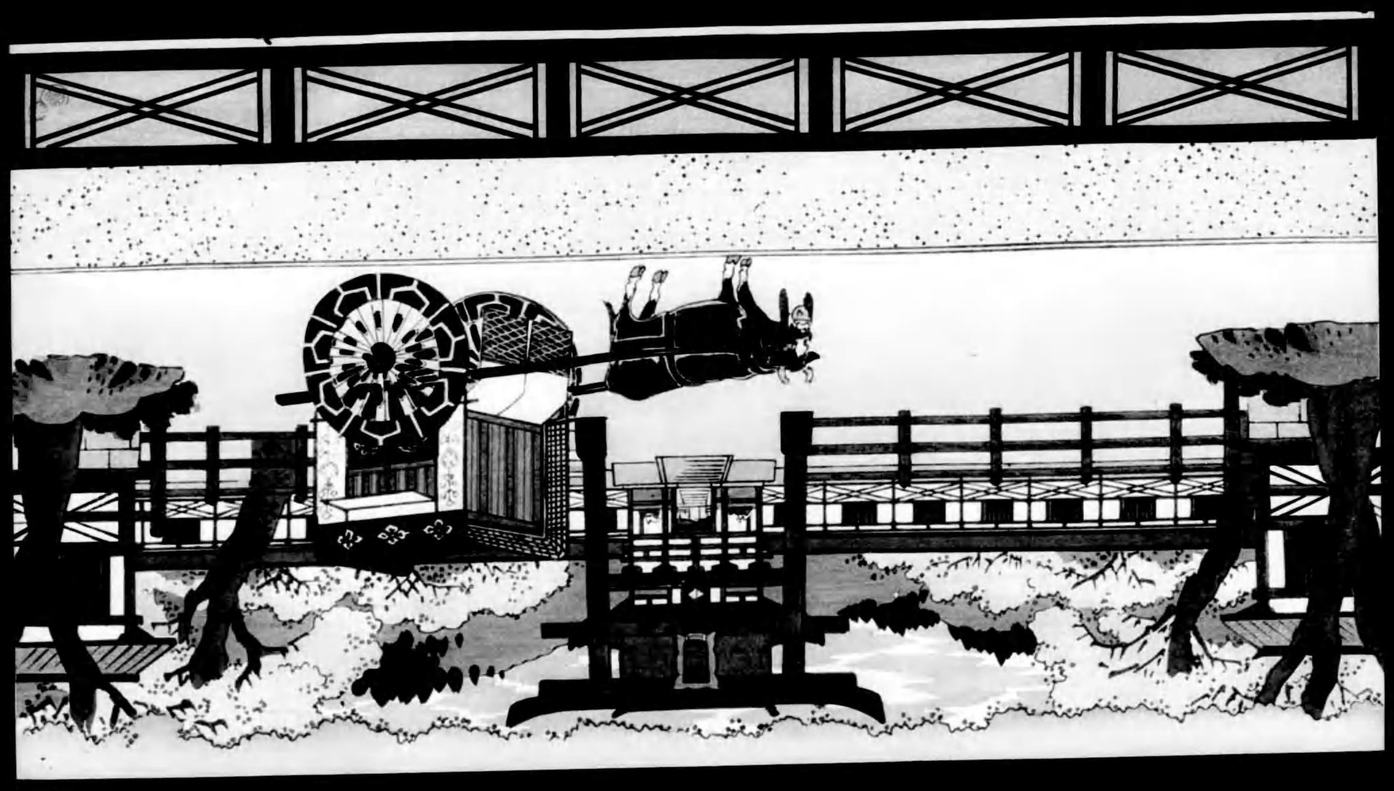
八重垣姫

腰元濡衣



舎人梅王丸

舎人松王丸



新版歌祭文

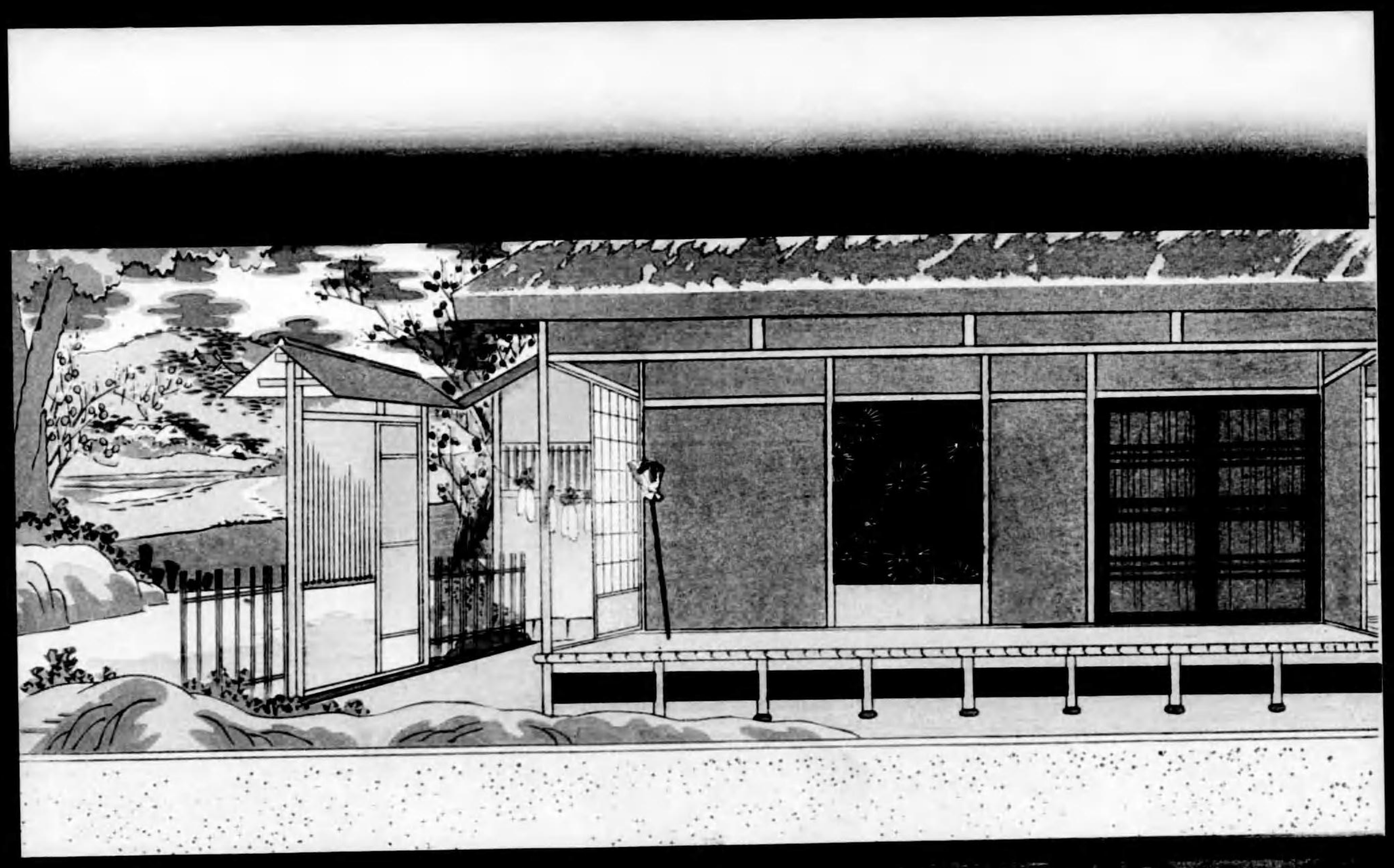
此狂言は半二作安永九年九月大坂竹本座初演操流行花の如し
此家後流行るのと云ふ大当 油屋の娘お染か嫁にすれ共お染は丁稚久松を慕ひ恋の奴
くなりぬ此奴より座摩神社にお染が行かん事を語る油屋の下男小介貴下の悪巧
を催ふるを見つかり 実を含ぼるお染久松も寺社内に出会ひ屋敷武士弥忠太勘六の為
に主人の縁組金を奪ふ事となる久松は又お染と[illegible]油内の悪企の報いなれば久
松は是より父と実家を償ひ親類の家なる先と祝言をさせんとする所へお染親子も諸ども
このけに訪ね来り親子の素見ひに借り死と決心する所お光久松を慕ふ子か尽さ捨て尼と
なり二人を添はせやらんとするに外に園へ落るも聞かせの母は身の不幸とお染は駕に久松は
駕に乗り油屋へ帰るも是野崎村の段とて操浄瑠璃にては名狂言なり
久松の主家は油屋夫婦とて久松の父久作は元家に奉公の昔家臣にて家より
預る宝刀を奪はれ其名を縁に相勤せり当時未だ幼なき久松は乳母お庄に預
けられ乳母の兄久作の手に育られ油屋に奉公せしむ かくて後久松は世に出され
と宝刀の行衛を探索す
油屋の後は深ねてより油屋に目貫因の小判を奪ひ それを棚にかお染を嫁ると結
納金一つの刀を質ると深どもお夏は太郎に盗まれとも此の一つの名刀にて因縁
深かりしなりかかる処へ乳母お庄来りて以前の勘当不小は姓名と知れる
処に小介太郎等の悪事を聞かれて是にて先久松は身の露と晴
らすべからず依ては出家後へ嫁入する事を断ひ両人情死するを結局とす

後援者

太夫　竹本津太夫
三味線　鶴澤友次郎
人形　吉田栄三

お染

久松
久作



流々木高綱

時政息女時姫

414-38

日本名物

大阪文楽人形画集 第二輯

長谷川小信筆

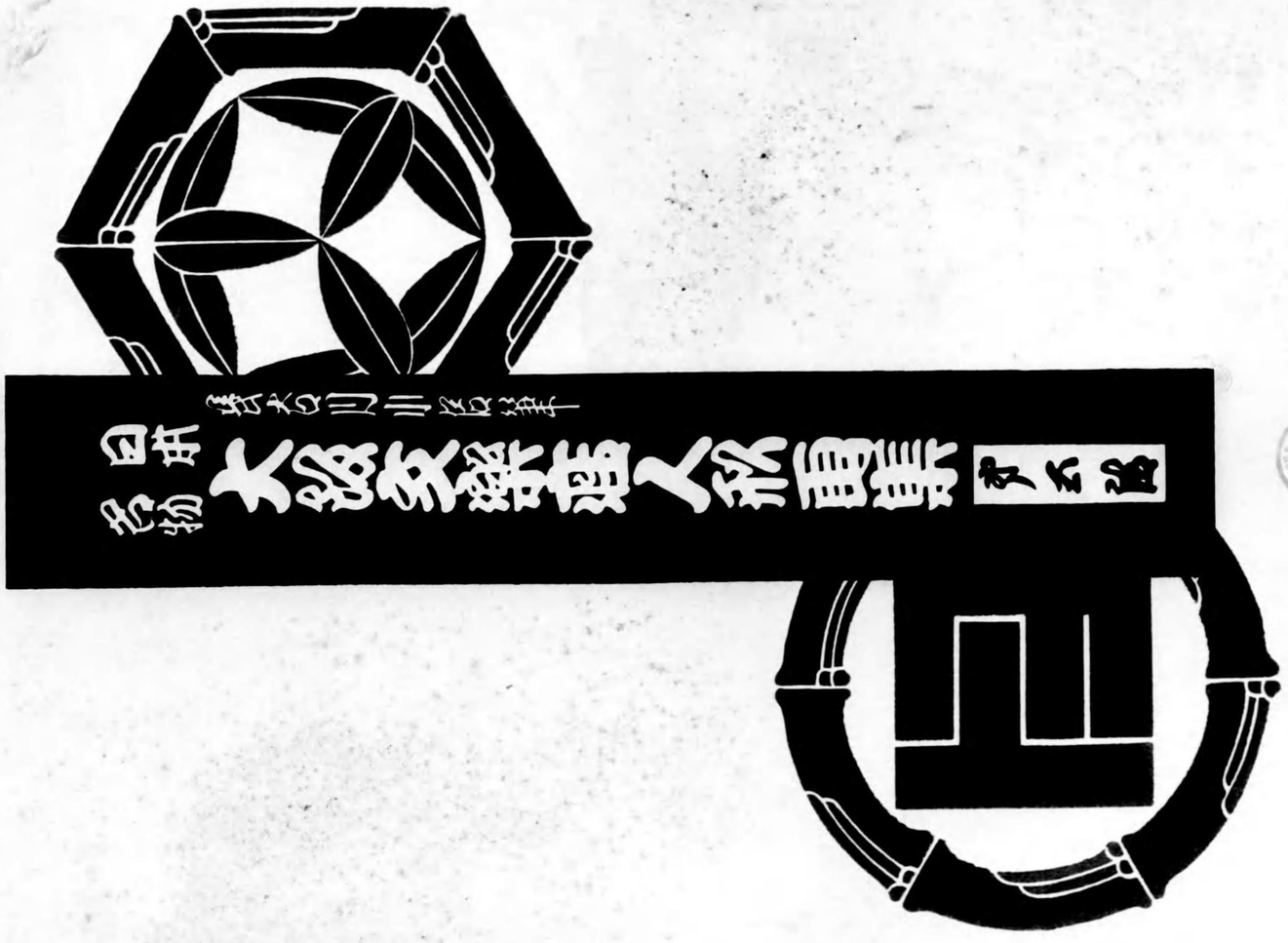
大正 15.8.25 購求

414-38

大正
16.8.25

414-38

大阪
15.8.
購求



日本名物

大阪文楽座人形画集

第六輯

長谷川小信筆

日本名物

大阪文楽座人形画集

長谷川小信筆

第七輯

日本名物

大阪文楽座人形画集

長谷川小信筆

第八輯

日本名物 大阪文楽座人形画集 第九輯

長谷川小信筆

日本名物 大阪文楽座人形画集

長谷川小信筆

第十輯

長谷川小信筆

日本名物

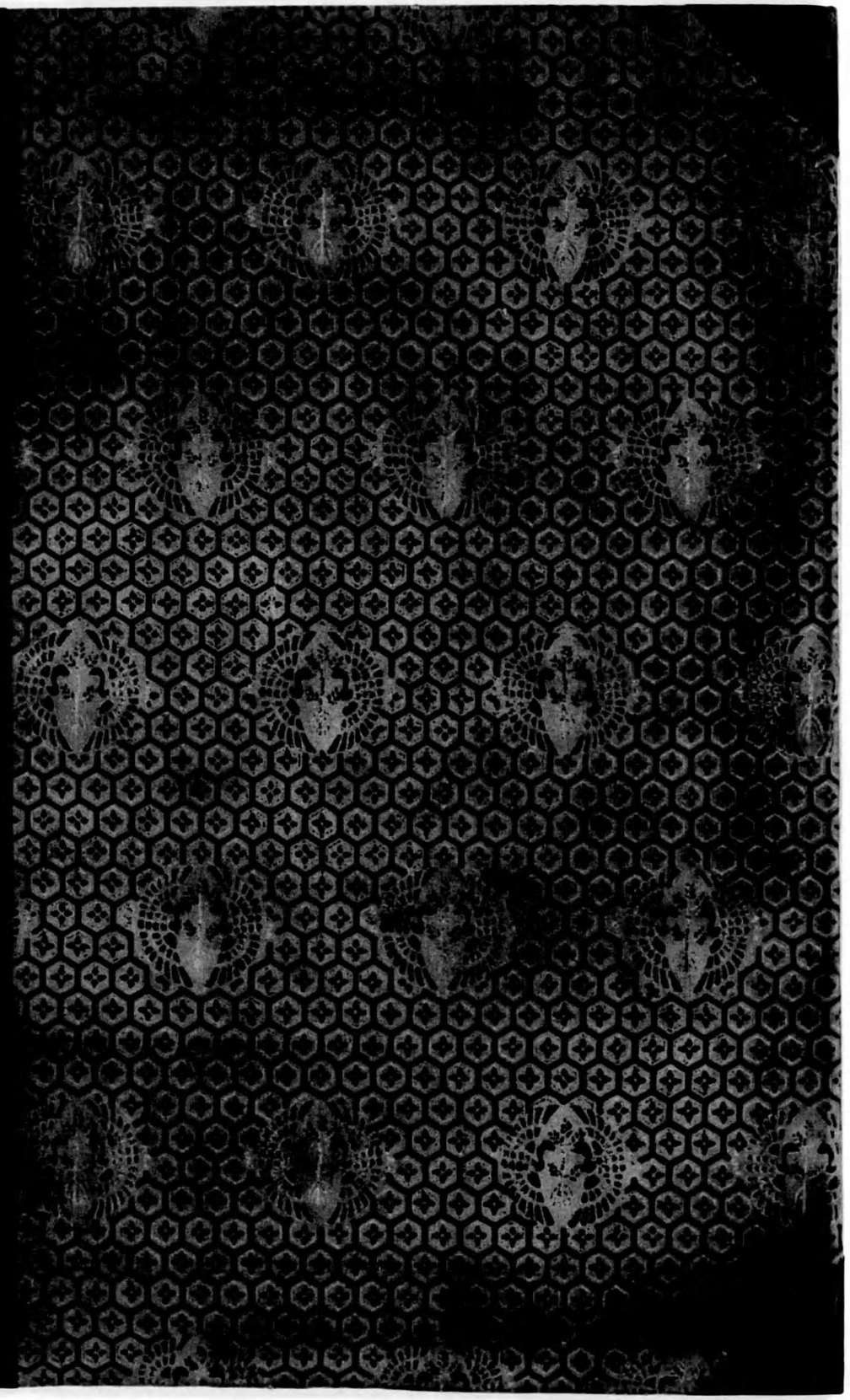
大阪文楽人形画集

第十一輯

大正十五年三月十五日印刷
全　三月二十日發行

編輯兼發行者　林　榮吉　京都市西洞院五條北入
筆者　長谷川小信
彫師　佐藤重一
摺師　板垣八重松

定價參圓五拾錢也

發行所　美術社　東京市四谷區花園町十番地
電話四谷六七五〇番
振替東京四三八五番

終